

平成21年度  
入学試験問題

国 語

2月1日 午前

受験番号	氏 名

中村中学校

一 次の(1)～(10)の——線のカタカナは漢字に直し、漢字はその

読みを答えなさい。

- (1) アタタかい料理を食べる。
- (2) すばらしいセイセキをおさめる。
- (3) 有名人のデンキを読む。
- (4) とびらをシめる。
- (5) 友情にカンシャする。
- (6) たき火を囲む。
- (7) 世間のうわさになやむ。
- (8) 栄養のある食物をとる。
- (9) 年月を経る。
- (10) とても貴重な体験をする。

二 次の(1)～(5)のことわざと意味が反対のものを、ア～クから一

つ選び記号で答えなさい。

- (1) 飛んで火にいる夏の虫
  - (2) 立つ鳥あとをにごさず
  - (3) のれんにうでおし
  - (4) 好きこそもの上手なれじょうず
  - (5) かえるの子はかえる
- ア、後は野となれ山となれ  
イ、一挙兩得  
ウ、ねこに小判  
エ、打てばひびく  
オ、長い物には巻かれる  
カ、君子危うきに近寄らず  
キ、トンビがタカを生む  
ク、下手の横好きへた

三 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

\* 字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

「人は一人では生きていけない」

皆さんは先生やご両親から、よくこうした言葉を聞かされたこと  
はありませんか。テレビドラマなどでもこんなセリフをよく耳にし  
ます。「たしかにそうだな、人間一人では生きていけない」とこ  
の言葉に素直に納得する人もいるかもしれませんが。でも反対に「ホ  
ントにそうかな。なんかしっくりこないな。人はじつは一人でだっ  
て十分生きていけるんじゃないかな」と思う人だっているでしょう。  
皆さんはどう思われるでしょうか。

① この問いに関する答えの傾向としては、こんな予想が立てられま  
す。年齢が上になればなるほど、そして暮らしている場所が地方で  
あればあるほど、「人は一人では生きていられない」と答える可能  
性が高い。そして若い年代でしかも都会暮らしであればあるほど、  
「案外人間は一人で生きていけるのではないか」と答える割合が多  
いのではないかと。もちろん都会暮らしの若者すべてが「一人でも  
生きていられる」と考えるわけではないでしょう。しかし全体的に  
はこうした傾向が見られるのではないかと思われま

す。  
人々との（つながり）の問題を考える最初の出发点として、人

は本当に一人では生きられないのか、それとも、まあそれなりに生  
きていけるのかといった問いを立ててみましょう。

かつての日本には「ムラ社会」という言葉でよく表現されるよう  
な地域共同体が存在していました。「ご近所の人の顔と名前はぜん  
ぶわかる」といった集落がそれですね。これは、何も地方の農村や  
漁村だけに限ったことでなく、東京のような都会にだってあったの  
です。【A】『ALWAYS 三丁目の夕日』——映画ですから描き  
方にはフイクションの要素も多分に入っているとはいえ——のよう  
に、近所に住む住人同士の関係が非常に濃密な「ご町内」が、昭和  
四〇年くらいまでの日本には確かにありました。

そんな「ムラ社会」が確固として存在した昔であれば、これは明  
らかに「一人では生きていけない」ということは厳然とした事実で  
した。

なにより、食料や衣類をはじめ、生活に必要な物資を調達するた  
めにも、仕事に就くにしても、いろいろな人たちの手を借りなけれ  
ばいけなかったからです。こうした、物理的に一人では生活できな  
い時代は長く続きました。【B】

ところが近代社会になってきて、貨幣（＝お金）というものが、  
より生活を媒介する手段として浸透していくと、極端な話お金さ  
えあれば、生きるために必要なサービスはだいたい享受できるよ

うになりました。

とりわけ、今はコンビニなど二十四時間営業の店も増え、思い立った時にいつでも生活必需品は手に入れられるし、ネットショッピングと宅配を使えば、部屋から一步も出ずにあらゆるサービスを受けることも可能になっています。【C】働くにしても、仕事の種類によってはメールとファックスで全部済んでしまう場合だってあります。

このように、一人で生きていても昔のように困ることはありません。生き方としては、「誰とも付き合わず、一人で生きる」ことも選択可能なのです。

ある意味で、「人は一人では生きていけない」というこれまでの前提がもはや成立しない状況は現実には生じているといえるのです。

## 【D】

さて、こうした現代的状況を目の前にして私が言いたいのは、「だから、一人でも生きていけるんだよ」ということではありません。

みんなバラバラに自分の欲望のおもむくままに勝手に生きていきましようといったことでもありません。③「一人でも生きていくことが

できてしまう社会だから、人とつながることが昔より複雑で難しいのは当たり前だし、人とのつながりが本当の意味で大切になってきている」ということが言いたいのです。つながりの問題は、こうし

た観点から考え直したほうがよさそうです。

今の私たちは、お金さえあれば一人でも生きていける社会に生きています。

【X】、普通の人間の直感として「そうは言っても、一人はさびしいな」という感覚がありますね。本当に世捨て人のような生活が理想だという人もいないわけではありませんが、たいてい、仮にどんなに孤独癖の強い人でも、まったくの一人ぼっちではさびしいと感ずるものです。

【Y】なぜ一人ではさびしいのでしょうか。やはり親しい人、心から安心できる人と交流していたい、誰かとつながりを保ちたい。そのことが、人間の幸せのひとつの大きな柱を作っているからです。だからほとんどの人が友だちがほしいし、家庭の幸せを求めているわけです。

あの人と付き合うと便利だとか便利じゃないとか、得だとか損だとかいった、そういった利得の側面で人がつながっている面もたしかにあるけれども、しかし人と人とのつながりはそれだけではないわけです。

## 【Z】

「人は一人でも生きていけるか」という問いに対する私の答えは、「現代社会において基本的に人間は経済的条件と身体的条件がそろえば、一人で生きていくことも不可能ではない。しかし、

大丈夫、一人で生きていけると思込んでいても、人はどこかで必ず

他の人々とのつながりを求めがちになるだろう」です。

(菅野仁『友だち幻想<sup>げんそう</sup> 人と人の〈つながり〉を考える』)

※『ALWAYS 三丁目の夕日』……昭和三〇年代の東京の下町

における人々の姿を描いた、二〇〇五年公開の日本映画。

※フィクション……作り話。

※媒介……両方の間に立って取り次ぐこと。

※享受……受け取って自分のものにする事。

問一 —— 線①とありますが、そのような予想が立てられるのは

なぜですか。その理由として適当なものを次から一つ選び、  
記号で答えなさい。

ア、一人では生きていけない「ムラ社会」での生活を経験して  
いる人が多いから。

イ、かつて地域共同体があったのは地方だけだったから。

ウ、コンビニなどの便利なサービスを利用することができない  
から。

エ、年を取るにつれて、周囲の人々との関係が深まっていくから。

問二 この本文には次の一文がぬけています。その一文が入る場所

を文中の【A】～【D】から選び、記号で答えなさい。

だから村の交際から締め出されてしまう「村八分」というペナ<sup>※</sup>  
ルティは、わりと最近まで死活問題<sup>しかつ</sup>だったわけです。

※ペナルティ……罰則<sup>ばつそく</sup>。

問三 ~~~~~線 a ~ d の熟語の中から、成り立ちの異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問四 ———線②とありますが、それはなぜですか。次の語を用いて、理由を七十字以内で説明しなさい。

「昔は」 「今は」

問五 X ~ Z にあてはまる語を次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア、だから イ、では ウ、でも エ、たとえば

問六 ———線③についてくわしく説明した次の文の I、

II にあてはまる二字の熟語を、——線③より前の文中からぬき出して答えなさい。

生活に I なるものは人と接することなしに手に入れられ、II 的に一人で生きていくことは可能である社会。

問七 ———線④とありますが、その例として適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、現代は近所の人との付き合いが少ないため、いざという時に助け合える仲間ができない。

イ、コンビニの利用者は若者が多いため、世代を超えた人間関係を作りづらい。

ウ、ネットショッピングは売り手と買い手が実際に会わないため、信頼関係が築きづらい。

エ、メールでのやりとりは相手の表情が見えないため、気持ちが伝わっているか不安である。

問八 ———線ア ~ エのうち、性質の異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問九 ———線⑤とありますが、一人で生きていくことが不可能ではないのに、それでも筆者がこのように言うのはなぜですか。

本文中の言葉を用いて六十文字以内で説明しなさい。

四 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

\*字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

十二歳の麻実<sup>あさみ</sup>は、父の単身赴任<sup>ふにん</sup>のため、四年間母と二人暮らしであった。そんな時、急に母が乳ガンで入院し手術することになった。一人になった麻実は、自分がまじめにやっつければ母が助かると信じ、一生けん命家事に取り組んだ。手術の日、父は付きそいからおそく帰って来た。

「ともかく、きょうはぶじすんだ。よかった、よかった。あしたのことは、あしたや。さあふろ入って、ともかくねる」

お父さんは、天じょうを見あげ、自分にいいきかせるようにいった。

麻実はお母さんのことをききたいと思った。でもお父さんが、何度も大きくかたで息をしているのを見ると、いいだせなかった。

麻実は山すその道を歩いていった。風もなく、音もしない。たそがれどきのもの悲しい感じがした。

ふと見ると、麻実はひとりだった。お母さんとふたりで歩いてきたはずなのに、お母さんがいない。

あたりはうすぐらくなり、だれもいず、たったひとり、麻実だけがとりのこされていた。

「お母さん」

かすれる声でよんでみた。

けれどもそれは、もれた息ほどにしかきこえない。麻実はまったくのひとりだということを感じた。

ふいに麻実は遠くにいた。そして山すその一本道をひとり歩いていて自分を、もうひとりの自分が見ていた。

見ているのも、見られているのも、麻実だった。そして見えている麻実は、見られているひとりぼっちの麻実の恐怖<sup>きょうふ</sup>でしめつけられている気もちで、からだ金しばりになってしまっそうだった。

お母さん、お母さんはどこ！

麻実は心の中でさけんでいた。

おいていかないで！

おそろしさで、むねがはりさけそうだった。口がきけなかった。

悲しいので、というようなものではない。さびしい、というていどのものでもない。せまりくる闇<sup>やみ</sup>からのがれようと、必死だった。

① いまにも闇は、麻実を飲みこんでしまいそうに思えた。

そばを歩いていたはずのお母さんがいない。そのことが、麻実を絶望的にした。心臓がのどからとびだしそうだった。

麻実は、あせをかいていた。

見なれた蛍光灯<sup>けいこうとう</sup>の豆電球がついていた。自分のベッドにいた。目をこらしてへやの中を見つめた。はっきり目ざめたかった。

麻実の背中を、しめったつめたい風がなでた。

よかった、ゆめだったんだ。でも……、ほんとに、ゆめ？

手のひらが、しめっていた。なのに、のどがかわいている。

水をたっぷりふくんだ、海綿みたいに重いからだをひきずるよう

にして、台所にいった。

お父さんの軽いいびきがきこえた。

麻実は立ちどまった。きそく正しいお父さんのいびきをきいてい

ると、どきどきがいつのまにかおさまってきた。

つぎの日、麻実は学校の帰り、病院によった。

お母さんのへやは、手術まえとはべつだ。へやの入り口にかけて

ある名前の札を、ひとつひとつ見ながらさがしていると、だんだん

むねが苦しくなってきた。

お母さんのそばにもうきている、というときめきと、お母さん、

どうなっているだろう、という不安がごちゃまぜになっている。

お父さんはけさ、

「なんにも病院かられんらくないということは、順調やということ

やろ」

と、自分にもいいきかせるように話しながら出ていったけれど

……。

江坂美里、えさかみさと。

心の中でつぶやきながら見ていくと、いちばんはしのへやにその

名前があった。とたんに江坂美里は、I、という名前になった。

ドアをノックする。なんだか緊張きんちようして、小さくしかできない。

返事はない。麻実は息をひとつして、もう一度ノックした。

「はい、どうぞ」

お父さんの声が出た。麻実はほっとして、かたの力がぬけた。

「おう、きたか」

ドアをあけると、スプーンをもったお父さんが、こっちをむいて

わらった。麻実はてれくさいような、へんな気分になる。

お母さんはねたまま、手をAとふった。そして口をあーん、

とあけた。お父さんが、メロンをスプーンでお母さんの口に入れた。

そんなことは家でも見たことがなかった。

麻実は、だまってベッドのそばにいった。

「どう、メロンよ。みんな親切だし、うん、なかなかこの生活、わ

るくはないなあ」

お母さんは力のない声で、いばってみせた。

「あほか、こっちの身にもなってくれや。まるで下僕げぼくや」

お父さんはそういいながら、またメロンをお母さんの口にはこんだ。

「ゲボク？」

麻実がききかえすと、お父さんはふっとわらって、「男のII」

とこたえた。

「あら、そのわりに、従順ではないわねえ」

メロンのあまいかおりを、へやにひろげながら、お母さんが口を  
はさんだ。

お父さんは、麻実に同意をもとめるように、目くばせした。

「まあ、おかけなさい」

お母さんは、つつ立ったままの麻実に、ソファを指さした。

「うん」

なんだかお客さんのようなぎこちなさが、まだのこっているけれど、麻実はすみのソファにすわった。

そこからお母さんの顔がよく見えた。

お母さんは青白い顔をしていた。ふだんからあまり、お化粧をし

ない。それでもこんななげそつとやつれた顔は、はじめてだ。着て

いるパジャマは見なれたものだけれど、やっぱり家でのお母さんで

はなかった。

「ああ、おいしかった。麻実も、なんか食べる？」

「うん」

うなずくと、お母さんはにこっとした。いつものおチャメなお母

さんでなくて、みょうにやさしく、Bとした笑顔だ。

「つかれたから、ちょっとねむるわ」

つぶやくようにいうと、目をつぶった。

ふたりは、お母さんの寝息をたしかめると、へやを出た。

お父さんの話だと、お母さんは、乳房のガンとその周辺をとった  
あと、おなかの筋肉をとってきてむねに入れ、お乳の形にして、ひ  
ふをかぶせたそうだと。だから、水着も着られるし、服を着ていると  
手術をしたのはわからないらしい。

しばらくは、重いものをもったり、つかれたり、風邪をひいたり  
しないように気をつけないといけない。

「麻実はお母さんの保護者のつもりで、むちゃせんよう、見はって  
いてほしい」

と、病院の喫茶室で、お父さんはCという。

麻実はうん、うん、とひとつひとつにうなずいた。うなずきなが

ら、どこかで、これはゆめを見ているのではないだろうか、と思っ  
ていた。

喫茶室につづく中庭は、かげりははじめた日を受けて、きらきらと  
光っていた。赤や黄色の落ち葉が、しばふにはえてうつくしい。

来年は西中さんの※いっていた、カラマツの黄葉を見にいききたいな。

もちろん、お母さんと、わたしと、お父さんで。

麻実はぼんやりと考えた。

② 来年？ どんなふうになっているのだろう……。見当がつかない。

だって一週間で、こうもかわるのだから。

お母さんは検査を受け、ガンとわかり、入院し、手術をした。

福岡のお父さんとは、もうお正月まで会えないかもしれないと思っていたのに、こうして病院の喫茶室で、話をしている。

麻実小さく頭をふった。

「お母さんから電話あったとき、またひっかけようとしてるんところがうか、思った。そやけどなあ、いまでもふっとだまされてるんちがうか、思うもんな」

お父さんはいって、目じりにしわをよせて、わらった。

麻実もちょっとわらって、うなずいた。そうしたら、きゆうにおねがいっぱいになった。なみだがもりあがってきた。

下をむいたとたん、ぼろっと落ちた。思ってもみないことだった。

大きななみだは、つづいて落ちた。麻実はどうしてなみだが出るのか、わからなかった。悲しいとかではない。

お父さんはなにもいわず、ズボンのポケットからハンカチを出して、麻実にわたした。そして、自分も鼻をすすった。

お母さんの手術は成功し、このまま順調にいくと、三週間ちょっとで退院できるといふ。

「なるべく家にもどるようにするから、麻実、がんばってくれよな。

お母さんになおってもらわな、あかんから」

「うん」と、もう何度めかわからない、うん、をいい、麻実は少し

130

ぬれたハンカチをお父さんにかえた。

そして上目づかいにお父さんを見て、小さい声できいた。

「お母さん、死ねへんよね」

「あほ、死ぬか。死ぬもんか。死なせへん」

お父さんはおこったようにいった。

「絶対にやで」

麻実は、なきわらいになった。

「そんなこと、考えんでもええ」

お父さんはコーヒーをいきおいよく飲みほした。

喫茶室は人がふえていた。わらい声や、しんこくな顔で話す人たちのざわめきで、<sup>※ピージーエム</sup>BGMがきこえない。

院内アナウンスを知らせるチャイムが鳴った。つづいて、

「外科の佐伯先生、ナースステーションにおもどりください」

と、やわらかな女の人の声でアナウンスがあった。

お父さんが顔を上げた。<sup>③</sup>麻実ははっとしてお父さんを見た。

「佐伯先生って、お母さんの」

「うん、主治医の先生や」

お父さんも、こわばった顔になっている。

「お母さん……に、なにか」

お父さんは、それにはこたえず伝票をつかむと、レジにいった。

150

145

140

135

麻実は待たずに、エレベーターにいき、ボタンをおした。お父さんが走ってきたと同時に、エレベーターのドアがあいた。

155

ふたりはお母さんの病室につくまで、話さなかった。小走りですテーシヨンのまえをぬけ、歩行器でゆっくり歩いている患者さんかんじやの横をすりぬけた。

麻実はどきどきしていた。そのとき、お母さんのへやから、わらい声こゑがきこえた。

160

「ああ、よかった」

お父さんが立ちどまり、大きくかたで息をすいていった。麻実もおっと息をはいた。またわらい声がおこった。

お父さんは、ろうかの長いすに、どすんとこしをおろした。麻実も同じようにした。

165

「ほんまにもう。人さわがせやなあ」

麻実は口をとがらせた。そしておかしくなった。お父さんも同じらしい。ふたりは顔を見あわせ、くすくすわらった。

(大谷美和子『またね』)

※西中さん……母の手術前に母と同室だった入院患者。

※BGM……ふんいきづくりのために流す音楽。

問一——線①で使われている表現技法として適当なものを一つ

次から選び、記号で答えなさい。

ア、直喩ちよくゆ イ、反復法はんぷく ウ、対句たいく エ、擬人法ぎじん

問二——に入る四字の言葉を本文中からぬき出しなさい。

問三——   にあてはまるものを次からそれぞれ選び、

記号で答えなさい。

ア、しみじみ イ、ほそぼそ ウ、ぼつぼつ エ、ひらひら

問四——に入る言葉として最も適当なものを次から選び、記

号で答えなさい。

ア、看護師 イ、召し使いめし ウ、お弟子さんでし エ、料理人

問五——線②とありますが、麻実はどんなことがきっかけで、

来年のことの見当がつかなくなってしまったのですか。二つ

あげ、それぞれ二十字～三十字で答えなさい。

問六——線③とありますが、この時の麻実の気持ちを三十字以

内で答えなさい。

問七 この文章に書かれている季節を、漢字一字で答えなさい。

問八 次の問いに答えなさい。

(1) 本文中で、麻実が見たゆめの中をえがいている部分はどこですか。最初と最後の八字をぬき出しなさい。

(2) (1)のゆめの内容を生み出したのは、麻実のどのような心情ですか。その心情を最もよく表している麻実の言葉を、本文の会話文の中からさがし、ぬき出しなさい。